

【コラム6】 食といのちと生活

—つながりが見えてくること—

安川由貴子（京都聖母女学院短期大学）

私たちが日々感じている「おいしさ」は、どこからくるのでしょうか。京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域と京都大学大学院教育学研究科との協働の学びの空間創りの中で、「食」を通じて、知り、考え、味わい、感じる機会が多くありました。味覚はもちろん、視覚や嗅覚によってもおいしさは変化します。しかし、それだけでしょうか。「味覚と他の感覚を重ねあわす」、「『耳を澄ます料理』を味わう!」、「ローカルな料理を創作する」、「季節の味を楽しもう!」をテーマにした「授業」が行なわれました。例えば、土鍋でご飯を炊くときの湯気の「匂い」や沸騰している「音」から炊け具合を知るという、素材と丁寧に関わる過程が、味わい深さを生みだしていることに気づきました。そして、「素材」の味や「匂」のおいしさ、「新鮮さ」を生かす中で、触感や食感、味の違いを、身体や五感を通して実感しました。また、料理を作る際に耳を澄ましてみると、重なり合う音や匂いから、出来上がりつつある料理を想像するだけでなく、子どもの頃や過去の思い出が蘇ってくることもありました。実際に味わう中で、料理をしてくれた人や丹精を込めて作ってくれた生産者の人に想いを馳せることもあります。このように、「味わう」ということはとても「総合的」なものであり、様々な要素がつながり融合されていくとき、「おいしさ」も一層増していくのではないのでしょうか。

また、いのちをいただいて生きていくことについて、野殿・童仙房地域のある猟師さんから次のようなお話をうかがうことができました。「動物を食べるのは、生きていくための手段としてです。残したり、もったいないことをしたりしたら、逆にかわいそうです。かわいそうの考え方が違います。動物はたまたま血が出たりするため、畑で野菜を作って食べるものにはいきません。けれども、それに背を向けずに正面からぶつかり、こういうことがあるから、われわれは生きていけるのだということを教えてあげるのも教育です。このような教育は、学校の中ではできにくいでしょう。生活密着型でなければできません。先生が授業の中で行なうのと、われわれが生活圏のなかで行なうのとは違うのです」と。「かわいそう」の考え方の違い、生活圏の中で学ぶことの意味は、スーパーマーケットで食料品を購入するという都市型のライフスタイルではなかなか学ぶことができないのではないかと思います。

このように、「食べること」、「生きること」、「学ぶこと」がつながっており、これらの学びがその「周辺」や「切り離されたもの」ではないことを実感しました。学ぶ空間も時間も多様であり、学校だけが学びの場ではないこともあらためて教えてくれます。他方、地

域に関わる中で農業の置かれている現実を知り、私たちの消費生活や食糧輸入との関連など、地域や農業という枠を超えたより大きなコンテキストへの気づきももたらされています。私たちはこのような状況を、「対象」としてとらえるのではなく、そのコンテキストをつくっている一人でもあると自覚しながら、関わっていく必要があるのではないのでしょうか。野殿・童仙房での活動を通じて、沢山の新たな出会いと発見がありました。一人ひとりの、そしてひとつひとつのローカルな知が、交じりあい、重なりあい、交換しあい、深めあいながら、新たな知としてこれからも生成していくことを願っています。